

福山大学開学四十周年記念
喜多流能楽公演

能楽

日時

平成27年6月27日(土) 午前11時45分開演

場所／福山大学 大学会館1階ホール 主催／福山大学

福山大学 開学四十周年記念

喜多流能楽公演

平成二十七年六月二十七日(土) 午前十一時四十五分開演

福山大学 大学会館一階ホール

仕舞

高砂

大島 政允

能

シテ(天人) 友枝 昭世

羽衣

ワキ(白龍) 森 常好

ワキツレ(漁夫) 館田 善博

ワキツレ(漁夫) 森 常太郎

後見

塩津 哲生

中村 邦生

地謡

金子敬一郎 長島 茂

友枝 雄人 粟谷 能夫

狩野 了一 大島 政允

大島 輝久 出雲 康雅

大鼓 國川 純

太鼓 前川 光長

小鼓 成田 達志

笛 一噌 仙幸

解説

■ 能について

能は室町時代、足利義満の後援を受け観阿弥・世阿弥父子によって大成された舞台芸能です。信長、秀吉、家康なども愛好し、江戸時代には武家の式楽となりました。

その演技の根本は、舞踊の技術と音楽性を求め、現代の写実的な演劇とは正反対の方向を指した歌舞劇といえます。面をつけて演じる仮面劇でもあります。謡という声楽と囃子という器楽にのって舞踊的な所作でストーリーを進める形をとっています。舞踊と音楽と演劇とが一体となっている点では、オペラやミュージカルに近い存在と言えるでしょう。能の曲の典拠の多くは、伊勢物語、源氏物語、平家物語など古典に求めています。現行曲は二四〇曲ほどありますが、よく演能されるのは約八〇曲ぐらいです。江戸時代は新しく能を作ることは禁じられており、明治以降作られたものを新作能といえます。最近では復曲、創作曲の上演も活発になっています。

■ 仕舞「高砂」

日本古来よりお祝いの席では欠かせない代表的な曲目です。後半部分の住吉明神が天下泰平、国土安穩の祝意を込めて颯爽と舞います。仕舞とは能装束や能面を用いない略式の上演形態の一つで、紋付袴姿の演者が、謡と共に、曲中の舞どころのみを演じます。

終了予定 十二時五十分頃

主な出演者紹介



塩津 哲生
能楽シテ方 喜多流職分
国総合認定重要無形文化財
1945年熊本生まれ
15世宗家喜多実師に師事
2007年 芸術選奨文部科学大臣賞受賞
親世寿夫記念法政大学能楽賞受賞
2008年 紫綬褒章受章
東京都在住



大島 政允
能楽シテ方 喜多流職分
国総合認定重要無形文化財
1942年広島生まれ
15世宗家喜多実師に師事
2013年 中国文化賞受賞
2013年 法政大学能楽賞受賞
2014年 地域文化功労賞受賞
福山市在住



一噌 仙幸
能楽笛方 一噌流
国個人認定重要無形文化財(人間国宝)
1940年生れ 一噌正之助の次男
1954年 父及び藤田大五郎に師事
1996年 親世寿夫記念法政大学能楽賞受賞
2008年 日本芸術院賞、
芸術院恩賜賞、紫綬褒章受章
東京都在住



友枝 昭世
能楽シテ方 喜多流職分
喜多流職分協議会代表
国個人認定重要無形文化財(人間国宝)
1940年東京生まれ
15世宗家喜多実師に師事
2000年 紫綬褒章受章
2003年 日本芸術院賞受賞
2004年 伝統文化ポーク賞大賞受賞
2011年 日本芸術院会員に就任
東京都在住



前川 光長
能楽太鼓方 金春流
国総合認定重要無形文化財
1952年生れ
二十二世金春惣右衛門、
前川宗四、前川光隆に師事
1989年 京都市芸術新人賞受賞
京都市在住



國川 純
能楽太鼓方 高安流
国総合認定重要無形文化財
1948年生れ
1965年 高安流宗家前安福春雄師に入門
2013年 親世寿夫記念法政大学能楽賞受賞
東京都在住



成田 達志
能楽小鼓方 幸流職分
国総合認定重要無形文化財
1964年生れ
曾和博朗(人間国宝)及び正博に師事
大阪能楽養成会主任講師
神戸市在住



森 常好
能楽ワキ方 下掛宝生流
国総合認定重要無形文化財
1955年生れ
父、森茂好(人間国宝)に師事
1998年 芸術選奨文部大臣新人賞受賞
2014年 親世寿夫記念法政大学能楽賞受賞
東京都在住



長島 茂
能楽シテ方 喜多流職分
国総合認定重要無形文化財
1959年福山生まれ、埼玉県在住



中村 邦生
能楽シテ方 喜多流職分
国総合認定重要無形文化財
1954年広島生まれ、東京都在住



出雲 康雅
能楽シテ方 喜多流職分
国総合認定重要無形文化財
1947年広島生まれ、東京都在住



粟谷 能夫
能楽シテ方 喜多流職分
国総合認定重要無形文化財
1949年東京生まれ、東京都在住



大島 輝久
能楽シテ方 喜多流職分
国総合認定重要無形文化財
1976年福山生まれ、東京都在住



金子 敬一郎
能楽シテ方 喜多流職分
国総合認定重要無形文化財
1968年松山生まれ、埼玉県在住



友枝 雄人
能楽シテ方 喜多流職分
国総合認定重要無形文化財
1967年東京生まれ、東京都在住



狩野 了一
能楽シテ方 喜多流職分
国総合認定重要無形文化財
1967年熊本生まれ、東京都在住



■能「羽衣」

ある春の朝、駿河国三保の松原に住む漁師の白龍が仲間の漁師と漁をしようと浜辺に行き、松の枝に掛かった美しい衣を見つけます。家の宝にしようとして、持って帰りかけると、一人の女性が現れて、「わたしは天人で、その衣がないと天に帰れません」と嘆きます。最初は衣を返すのを断る白龍ですが、天人の悲しむ姿を見て衣を返すことにします。その代りに天上界の舞楽を見せてくれるよう頼みますが、「衣を返すと、そのまま舞わないで天に帰るだろう」といいます。しかし、天人は「いや、疑いは人間にあり、天に偽りなきものを」と答え、白龍も素直に「あら恥ずかしや」と衣を返します。天人は喜んで羽衣を着し、地上に祝福を与えてやがて天高く富士山の彼方へ天高く昇っていきます。

世界各地に伝わる羽衣伝説が原拠ですが、能では伝説と違って天女は男の妻にはならず、より清純で気高い存在として描かれています。能を代表する祝言の趣を持った華やかな名曲です。



福山と能楽と喜多流について

江戸時代、二代将軍徳川秀忠の後援を受け、それまでであった四座（観世・宝生・金剛・金春）に加えて喜多流が一流の樹立を許され、能楽は武家の式楽（儀式用芸能）として多くの大名、武士に愛好されました。

福山初代藩主水野勝成は喜多流を好み、福山城築城時、伏見櫓等と共に組み立て式能舞台を譲り受け、城内や下屋敷で演能し、隠居後も流祖喜多七太夫を招いています。代々の藩主（勝俊、勝貞、勝種）も能に堪能で、勝貞の時代に組み立て式能舞台を頼の沼名前神社に寄進（現在、国重要文化財）、勝種の頃には七太夫直門の藩士もいて、その人が福山に帰藩して藩士の指導をしたとあります。

阿部家の時代も能楽は盛んで、武家のほか町人の間にも流行、各種行事の際に盛大に催されました。安政の大地震で大破した福山八幡宮同社境内の能舞台は幕末の蒼然たる時代にもかかわらず安政四年に再建されています。この舞台の鏡板は藤井松林の画、正面鴨居には喜多流の紋、左右に観世流の紋が彫り込んであります。（昭和十九年、三蔵稻荷に縮小され移築）

明治維新後、能楽は一時衰微しましたが、喜多流は名人とうたわれた十四世宗家喜多六平太師により再興しました。福山では藩士であった大島七太郎が師匠の羽田平之助、紋右衛門の跡を継ぎ、十四世宗家に師事し、備後一円に能楽を普及させました。その後、七太郎長男の寿太郎、壽太郎三男の久見も十四世宗家に師事し、地方では珍しい個人での能舞台を建て演能普及活動を精力的に行いました。現在は四代目政允を中心に五代目輝久と衣恵が国の内外で普及活動に努めています。



KITARYU OSHIMA



喜多流大島能楽堂

広島県福山市光南町2-2-2 TEL.084-923-2633 FAX.084-923-8730
www.noh-oshima.com osimano@orange.ocn.ne.jp

